



校報

水糸者

No. 1272

元年度・第131号

「AI時代に淘汰されない学力」とは

パート5

A I時代に淘汰されないための『学力』についてのシリーズ最終となるこの号では、『読解力』について紹介していきます。

経済協力開発機構（OECD）が学習到達度調査（PISA）で定義している『読解力』

「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、目的や場面などに応じて的確に内容を読み取り、その内容を利用、熟考する能力」としています。



つまり、「受信・受容（聞くこと、読むこと）」と「思考・判断・創造（考えること、思うこと）」、「発信・提示（話すこと、書くこと）」といった3つの要素の重なりで成り立つものとなり、単に「文章の内容を理解する力」を『読解力』とはしていないことがわかります。なお、学習指導要領「国語編」では、「読むこと」の構成を「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「考えの形成」、「共有」としていますので、この3つの要素とほぼ同じという事となります。

読解力が低下してきた『原因』と考えられること

社会の変化による、『文字に親しむ機会の減少』が大きな理由の1つだと考えられます。

⇒「読書」だけでなく「書く」、「話す」機会の減少。例えば、「メール・ライン文」に代表されるキーワード的な文章や会話だけでなく「絵文字」に代表される、言葉を使用しない感情表現や感情伝達が一般的となってきている。

また、心地よい事しか言わない人や親しい人とだけしか関わらない閉鎖的な「ネット・ライン」上での関係が主流となってきている。



文字に親しむ機会が少ない生活＝「読解力の低下」は、

6月28日の校報1188号でも紹介した「脳の中の脳」と言われている『前頭前野』を刺激しない生活となっており、その事は「勉強がよく理解できるかできないか」だけではなく、「人としての感性や感情」にまで影響が出る、子どもの脳の健全な発達に大変な支障が生じるという事となります。それは、「キレやすくなる」や「イライラ」「睡眠障害」、「集中力低下」、「視力の低下」、「遠近感のマヒ」などの症状として確実に出現してきます。



文字に親しむ機会が少ない生活や、人との「関わり」の少ない生活は、「読解力」の低下につながります。そして「脳」の健全な成長にも支障が生じてきます。

本校の

「文字に親しむ」ための活動
「読解力」を高める活動
「脳を刺激」する活動



本校では、どの教科にも「音読」や「視写」を意識的に取り入れています。

いわゆる「読み・書き・算」が『脳』の活性化につながっていく事がわかっていますので、調べ物は図書室で辞書や百科事典を使って手間暇かけてあえて苦労させながら調べさせる機会も設けています。先日の1年生の国語学習では、「番地」の意味について辞典で調べていました。

毎週水曜日の「かがやきタイム」は、「音読」や「視写」を中心に取り組みを継続しています。



図書委員会や図書ボランティアさんは読み聞かせや寸劇を行い、本への関心を高めてくれています。そのせいもあり、種小っ子は本が好きな子が多くいます。

「移動図書館号・テトラ号」も大人気です。廊下に座り込んで早速読書する子の姿も…。



毎週水曜日は「脳力の日」とし、朝は全校遊びや縦割り班遊びを行っています。五感を刺激する外遊びを通して、脳の健全な発達と心の開放だけでなく、友との「関わり」も学ばせています。



日々の授業では、友と「関わり合い」の機会を設け、課題解決に向かわせています。そして、学習したことを「他者への教え」として『発信』していきます。「他者への教え」の有効性については10月23日発行の校報1241号も参照ください。

子ども達が使っている国語の教科書を読んだ事がある方は感じたと思いますが、特に、中・高学年の「説明文」は難解な長文が多く配列されています。ぜひお子さんの国語の教科書を読んでみてください。普段全く読書の習慣のない子やスマホやPCだけで意味調べをしている子、家庭や地域で会話の少ない子、絵文字を多用している子にとって、説明文学習の時間は大変厳しい期間となっていると思われます。テストの時に問題文の意味が分かるかどうか（読解力）が、成績の大きな分かれ道となっていることは、紛れもない事実です。みんなで知恵を出し合い『字』に親しむ子にしていましょ。